

CONTENTS ◆晩秋のつどいレポート1 ◆おくさわ今と昔 ◆晩秋のつどいレポート2 ◆第3回フラワーアレンジメント講習会報告 ◆奥沢の歴史を訪ねて ◆活動報告 ◆会からのお知らせ

11月27日、奥沢東地区会館で行われた「晩秋のつどい」は、タロジロでお馴染みの南極越冬隊やグループサウンズを懐かしむ世代が多く、過去最大の81名が来場され大いに盛り上りました。

晩秋のつどいレポート1

お話 「地球を愛し、自然に親しみ探求した旅人 西堀榮三郎の探検人生」

第一次南極越冬隊長をつとめた西堀榮三郎の三男である峯夫さんが、父親としての、科学技術の指導者としての生涯をお話されました。

高級ちりめんの老舗の末っ子として生まれた榮三郎は、自然の中で思う存分遊ぶ一方、家族と従業員の中で人の役に立つことをしつけられて育ちました。中学生になると長年の親友となる今西錦司と登山に打ち込みます。ある時二人で、着の身着のままお互い話をしない約束で、山中で夜明かしをする冒険をし、自然の中に身を置き自然に溶け込んだ達成感を味わい感激したそうです。

京都大学に進んでからは山岳部を創設し、国内外の多くの山々に登っていますが、必ず学術調査を柱として、序でに山頂に登るといふ、地に足のついた研究活動をし、そこから今西錦司、梅棹忠夫、木原均、桑原武夫等の錚々たる学者が輩出されました。

科学から、人の役に立つ技術への転進を図るべく、京都大学助教授の職を辞し、京都を離れ現在の東芝

に入社、技術開発に邁進し高性能低コストの真空管「そら」の量産に成功します。

南極については、11歳の時に、白瀬隊長の南極探検報告会を聞いて大感激し、以後ライフワークとして取り組みます。鴨川の河原で1週間断食したり、一人40キロの本を背負って比叡山に籠り本を全部読み終わってから下山したり、登山は南極探検の準備のために冬山に行くという、極限状態への対処を研究したそうです。南極探検隊の準備についても、現場主義で日本独自の方法を編み出し、文部省の反対を合理的な方策で押し切り第1次観測隊を実現しています。(その考え方をスライド資料から転載しました。)

科学から技術へ展開し、晩年哲学的傾向を深めた榮三郎は、企業経営者に現場で楽しく働ける経営のあり方を熱心に講演しました。現役時代には、品質管理手法でも、製品品質と現場の人の品質を重視した独自の日本人的な方法を開発しています。

峯夫さんも、父上の薫陶を受け、世界的な技術開発の実績を上げています。最近、西堀榮三郎邸「人生にロマンを求める会」を立上げ、保存・運営の活動を開始しておられます。(鈴木)



当時の文部省南極総合推進本部

1. 初年度の予算総額は南極越冬隊許可しない
2. 大抵は予算も許可も立派な雪上車がある
3. 南極用飛行機予算がなく必要でない

西堀榮三郎の主張

本観測で経験のない科学者が初めて越冬するのは危険すぎる
機材は壊れる事が多く予備部品が補給できなく燃料も2山以上の貯えが必要。大抵マジックも食べさせられる。
南極用飛行機での輸送ルートの前線は絶対に必要

結果・成果

11名で日本初の越冬この成果で今がある
カマフト大を19回連続して1500km正午雪上車1台の活躍1年後カマフト正午
朝日新聞の好意で実現、大いに活躍する

第一次南極越冬は当初許可されていなかったが西堀榮三郎の強い意志と主張で可能にする



(西堀峯夫さん)

おくさわ今と昔

(このシリーズでは奥沢に長くお住まいの方、新しく移ってきた方々など、毎回2人の住民の方が登場し、この街にちなんだエピソードを語っていただきます。)

「九品仏川」

奥沢二丁目 吉村 恵美子

流れゆく大根の葉の早さかな

高浜虚子

俳句の初心者を中心に講師は、この句を良い句のお手本として黒板に書かれました。

お百姓さんが抜いて来た大根を小川でせっせと洗っています。時々ちぎれた葉が流れます、静かな小川なのに思わぬ早さで葉は流れて、もう小橋の向こうまで流れて行きました。

この句はこのような光景を詠んだのでしょうか。九品仏の吟行の折りの句だと聞いたことがあります。とするとこの小川は九品仏川でしょう。この句の詠まれた時代からずっと後のことになりますが、私は美しかったこの川を今も覚えています。

単身赴任などはない時代で、父の転勤の度に家族揃って引っ越しをしており、東京に戻った私は八幡中学へ転入学しました。

その頃は木造の校舎と校庭の他は何もない学校で、校庭の霜柱は見事なものでした。

学校の前に池があり九品仏はその向こうにあったのです。池の周りには水面を薄暗くするほど木が茂っていて、たっぷりと湧いた水は九品仏川に流れていました。

学校から自由ヶ丘方面に帰る道は何本かありましたが、たまに友人とおしゃべりしながら、九品仏川沿いに帰ることもありました。

畑はもう少なくて殆どは住宅でしたが、あるとき川沿いの畑一面に咲く菜の花を見て感激したことがありました。その後また父の転勤で奥沢から離れ、菜の花畑を見たのはこの時だけになりました。

池が埋め立てられ住宅地になったと聞いたのは何時だったのでしょうか。いま住宅地はしっかりと落ち着いて良い町になっています。先日ここを歩いた私は浦島太郎のような気持ちになってきました。

奥沢の町はどんどん変わっていて、四年前に帰った来た私は時々知らない町をさ迷っている気分になるのです。

「将来を担う君達に」

奥沢二丁目 伊賀 公雄

私は奥沢に生まれ育って来年には60年となる三代目の出来損ないでございます。小中学校共に地元八幡でして日常的に大先輩方々のお元氣な姿をお見掛けする度に己の人間的な小ささに反省しきりです。それでも私の小中学校時代は今から思うと大変幸せな楽しい日々でありました。小学校では当時授業が終了すると校舎・校庭内に残ることは許されずとりあえず一度は帰宅し、再度仲の良い級友達と多摩川台公園で野球をしたり、東工大構内の溜池でザリガニ釣り(時効ですので書きましたが何れも禁止行為です)をして日が暮れる迄遊び回っていました。社会的にも子供が日没近い時間迄屋外に居ても危険な状況には無く、見ず知らずの大人達から「もう暗くなって来たから早く帰りなさい」と声を掛けられれば素直に従える世の中でありました。

さて現在のお子さん達はどのようなのでしょうか? 昨年の3・11東日本大震災以降、お子さんはもちろん保護者の方達も私達の時代の様に何の心配も無く屋外で遊んだり、習い事に通ったり出来ているのだろうか? 一応この地奥沢では震災直後の様な余震に見舞われずに推移していますが昨年末から徐々に原発問題や今後予想される大規模地震についての真相・分析が発表される様になりました。

これらの事柄を思うに冒頭書きました私達年代の「幸せな楽しい日々」と同様な思い出を残していけるのかな?と思うと心が痛む思いで一杯になります。

私は阪神大震災の翌年から東京消防庁の災害時支援ボランティアとして活動しておりまして、その関係で年末に防災シンポジウムの聴講の機会があったのですがその際のパネリストの発言を今後も大切に胸に刻んでおこうと思っています。「ともかく生き残る最大の努力をしよう。これなくして復興・復活等は何の意味を持たない。そして私達大人はその原動力となってくれる子供達を何にも優先して守り育てていかなければなりません。」

奥沢の住民として"地域の絆"は勿論大切です!!

おくさわコンサート ♪ ヴィレッジ・シンガーズ

おくさわコンサートには、地元の方々に心からよるこんでいただける演奏グループをお招きすべく心がけてまいりましたが、時には双方の折合いがつかず途方にくれることがあります。

こんな時の救い神が、奥沢にお住まいの小松久さんです。

昔の名前に頼ってばかりと、お叱りを頂戴するのではと危惧しておりましたが、それも危惧に過ぎませんでした。

小松さんの演奏が始まると、聴衆のみなさまの喜びの顔と拍手が広い会場をうめ尽くしてしまったからです。

これまで、年々おくさわコンサートを重ねてまいりましたが、このように熱狂するお客さんが揃ったのは初めてのことと思います。

思わず頬に熱いものが流れてしまいました。

演奏曲名：一大きな古時計、月の夜は、星に願いを、
亜麻色の髪の乙女ほか (長瀬)



第3回フラワーアレンジメント講習会報告

師走の忙しが増す中、第3回目の講習会では新年に向けて正月飾りを作りました。今回は置き型にも壁掛けにもなる器作りにも挑戦し、ペットボトルと牛乳パックを基に漆喰紙や竹で思い思いの器ができてあがりました。労作のマイ器にマツ、センリョウ、ナンテン、スイートピー、ストックや獅子舞、水引などをアレンジ、お一人お一人の工夫が楽しく斬新でご自身の雰囲気そこはかとなく伝わってくるようでした。

出来上がった作品をいっせいに壁に飾った時はその場がぱっと華やかになってまるでホテルのエントランスロビー！のようでした。皆さんも作成中の真剣な表情から笑顔にもどって、リラックスされてお茶をいただきながら作品鑑賞、私も汗かきながらの興奮状態が落ち着いて、肩から力が抜けていくようでした。お茶が喉にしみました(笑)。お正月にはご家庭でご自分の作品をどのように飾られたか、お聞きしたいと思っています。

皆様からご提出いただいたアンケートは今後の講

習会企画に大変参考になります。ありがとうございました。ご要望に即した内容に近づきたいと思っておりますので、今後ともご意見をお聞かせください。また準備などには理事、会員その他の方々から多大なご協力をいただきまして厚く御礼申し上げます。

(マミフラワーデザインスクール講師 佐藤暁美)



奥沢の歴史を訪ねて

①奥沢の小字（こあざ）についてその1

今回よりおよそ10回に渡って奥沢の歴史を一度総ざらいしてみたい。

私は元々歴史、特に古代史以前が大好きな趣味人で、定年退職後奥沢の郷土史について調べてみようと思い、「土とみどりを守る会」に入るとともに「世田谷区誌研究会」にも入会し会合に参加してきた。

今回は最近流行りの逆説日本史的に逆に遡って行こうと思う。只比較的新しい明治以降は取敢えずおいておいて明治初期から江戸時代に遡って行こう。

まずは奥沢の名前の由来から。

以前から世田谷七沢の一つで奥沢と言われてきたが、最近もう少し尤もらしい理由付けを見つけた。それは、奥沢本村・奥沢新田だけでなく、等々力に目黒区衾村から現緑が丘にかけて深沢と呼ばれていたが、丑川（九品仏川）流域を呑川と分離して「奥深い沢」ということにしたためという。奥という言葉は必ずしも今でいう奥ではなくメインの道から外れ横道に入る時は奥と言うそうである。いずれにしる呑川の下流から見ての話で、鎌倉道を考察すると昔の人々の生活の流れが見えて来るがこれも後で考

（私たちの住むまち奥沢の成立ちはどうだったのでしょうか、調査結果をシリーズで紹介します。）

えたい。

奥沢本村に小字は元々朝鮮丸しかなかった。開平とも呼ばれるがそのいわれについては全く分かっていない。朝鮮丸は朝鮮山ともいい、大音寺を南端に細長い山が南北続いていたが、北部は開削されて住宅と奥沢中学校校庭になっている。昔大音寺下迄多摩川の入り江が入り込んでいて、ある時朝鮮の船が難破してるのが見られたからと伝えられている。

本村にはこのほか子安稲荷跡付近に稲荷丸という字が出来るが昭和の地図に載っているのでもっと新しい。それぞれの土地や遺跡については後日触れたいと考えている。（赤松）



（江戸時代の奥沢 [出典 世田谷の地名下巻]）

活動報告

●昨年からはじめた新しい小グループの活動は、フラワーアレンジメント講習会を2回開催し好評を頂いています。また街の落ち葉掃きプロジェクト（世田谷区の地域の絆推進事業）も2年目を迎え、2丁目以外の拠点づくりを行い順調に推移しています。主催側の戦力がやや手薄となっており、これらの活動への支援や参加をお待ちしています。

●今年の新春奥沢地区祭りは、1月15日（日）に奥沢小学校で開催されました。当会は例年通りの活動展示、シンボルフラワー（チェリーセージ）の苗配布とハーブティーのサービスを行いました。

会からのお知らせ

●早春のつどいは2月4日（土）午後1時30分から、奥沢東地区会館で催します。第1部 お話は井戸理恵子さんの「日本人と暦」です。第2部 おくさわコンサートは、佐藤道子さんのチェロ演奏をバックに、古屋和子さんのひとり語りの世界をお楽しみ頂きます（同封のチラシご参照）。

●土とみどりを守る会はいつでも新会員を募集しています。会の活動を支える会費は1口1,000円です。どうぞ御協力をお願い致します。入会のご連絡は下記へどうぞ。

編集後記：晩秋のつどいで西堀榮三郎伝を面白く拝聴しました。テレビドラマの放映中で、これが人気の一因だったと思われませんが、「南極大陸」は脚色が著しくお涙頂戴の幼児番組でしたが、西堀峯夫さんのお話では夢を実現しようとする大人のお話でした。今回の原発事故も西堀榮三郎さんのような、現場主義から得た生きた知識を駆使できる強力なリーダーがいたら、こんな体たらくにはならなかったと思うのは小生だけでしょうか。（鈴木）

土とみどりを守る会 連絡先

世田谷区奥沢 2-32-11 堀内正弘 5701-5901

世田谷区奥沢 2-19-9 長瀬雅義 5729-0126

世田谷区奥沢 2-18-6 鈴木 仁 3723-6659

ホームページ ; <http://tsuchimidori.net>

e-mail ; info@tsuchimidori.net